

編集後記

編集長(ダン シロウ)

ご承知のように、すべて連載記事のマガジン。長期に書いて下さっている方々には、年四回コンスタントに延々ということになる。当然、私生活では予定外の事態も起きる。そんな時には、休載していただいて良いと思っている。商業誌なら、定期購入者の期待があるから、買ったのに休載だったというのは、あってはならない事になる。

しかし執筆依頼も原稿料のお支払いもない位置づけのマガジン。無理なものは仕方がない。やむを得ない事態は了解だ。今回はちょっと休載が多めになっているがご容赦下さい。

昔、学部生に授業をしていた頃、遅刻者は集中して聞いている他学生の目障りだし、講師の集中もそがれて迷惑だから禁止だと言っていた。

その上で、どうしようもなく遅れてしまうことは、人生にはある。ちゃんと出席しようとしていたのに、遭遇してしまう事態は災難だ。気の毒でしたね、遅れてもよくたどり着きましたね、と遅刻した人をねぎらうことができるためには基本、みんなきちんと出席している事だと語っていた。

だらだらと授業の終盤に、出席回数確保に来るようなことはするな！その代わり、必ず面白いと思ってもらえる授業をするから！と宣言していた。(それでも、心ない目にあって、いい歳をして落胆したこともあった。)

本誌でも発行日に影響のあるような執筆遅延は迷惑行為。そう位置づけて作業しているので、たくさん原稿を扱っているのに、定期刊行がこれまで10年に渡って可能だった。

と、こんな事を書きながら今回も、「目次」の制作で、またまたミス連発。つくづく私はこの作業は向いていないのだと思う。執筆者の皆様には、そんなこともあるさとあらかじめ頂けると幸いです。

編集員(チバ アキオ)

日本の下り坂がこういう形で表れてくるんだなあと思うことばかりが見えるこの頃。自分がすべきことは何だろうと考える。今の若い人にとっては、私世代でも上世代。戦後のメジャーな組織や制度を維持継続してきた世代にあたるだろう。その維持継続が難しい状況が今ある。人がいないという現実。そして

世代が変われば創業時の思いは薄れていくのも当然。そこでは劣化が内部で起こっていく。それは国も、身の回りの組織も同じ。人が来ない、人を育てない、今いる人を大切にしない。「他に比べるとまし」という相対主義が蔓延し、現状維持の動きに終始する。よいと言える状況ではなく、ましという程度の状況を維持する。現状に適応できた恵まれた一部の人間が勝ち組となり、そこに自分や自分の子が入ることを目的に差別化に躍起になる。公立高校でもハイグレードコース、グレードコースなどを名づけ、成績で生徒を選別し、部活の先生にも成績を管理させ、逃げ場も与えない。そんなことを考えていると、このマガジンの存在と継続、そして執筆者の覚悟に敬意を表したい。書かない自分から、書く自分へ。考えない自分から、考える自分へ。一步前に出ない自分から、出る自分へ。社会を信じない自分から、信じる自分へ。匿名から、実名へ。伝わらないとあきらめたり、伝えてもしょうがないと思ったりする自分から、書き残す自分へ。常に自分からしか変化は始まらない。誰かがしてくれるなんて時代はきたことがない。今ある大切だと感じるものや仕組みの維持に貢献し、ないならば作る。それらはソーシャルワークの基本ではあるがそれが前例主義、正解主義、事なかれ主義に阻まれる。それでも、また明日が始まる。常に新しい朝が来る。

編集員(オオタニ タカシ)

今年ももう年末。マガジンの編集と併行して、職場では来年度の研修の企画を話し合う時期になった。話題にありがちなのは新規企画や行き詰っている研修のリニューアル案などで、“どんなテーマ(内容)にするか”についての話が大部分を占める。話し合いに参加しながら、テーマはもちろん大事ではあるけれど、テーマだけをどれだけ考えていっても勝ち目が薄いなあ、という思いが頭を占めるようになってきた。

現代は、テレビであれ、Webメディアであれ、ゲームであれ、さまざまなコンテンツが人の「可処分時間」を奪い合うようになった時代であると言われる。つまり、テレビドラマであれば1時間、映画であれば2-2.5時間、相手から時間をもらわないことには“視聴”という体験を提供できないということだ。“視聴”されないことには、中身がどんなに優れていても相手には届かない。もちろん、優れたテーマを掲げることで、相手が“それならば時間を作ろう”という動機づけを持ち、可処分時間を割いてくれる可能性もある。しかし、参加者が持っている他の予定や事情、居住地との位置関係なども影響する“研修”という文

脈で企画するという制約上、あまり勝算が高い取り組みとは思えない。

最近、何をするのかという内容(コンテンツ)よりも、誰が、どのようにするのかという文脈(コンテキスト)や、どのような仕組み(システム)で行うのか、ということが気になるようになってきた。大事なものであり、必要なものであると思うならば、「これが大事だ!」とコンテンツを叫ぶだけでなく、それが継続されていくような文脈や仕組みを考えておく必要がある。その仕組みに必要な要素の一つが「無理がない」ことだと思っている。つまり、誰かに負担や負荷が集中していたり、費用的に厳しかったり、相手に届けるために過大な労力を要したり、というような「無理」が生じていないことである。「無理」のあるシステムであっても頑張れば続けていくことはできるが、努力という文脈でしか継続できないものは、最終的には「システムの維持が目標」という本末転倒なことになりがちである。

その点、マガジンの編集は「無理なく」できています。立ち上げ時点での仕組みがうまくできているのだと思います。執筆者の皆さん、更新作業をしてくださる皆さん、ありがとうございます!

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町4-3-8
ランプラス二条御幸町4-0-2 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻39号

第10巻 第3号

2019年12月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第40号は2020年03月15日
発刊の予定です。

原稿締切2020年02月25日!

執筆者募集

10年目を迎えたマガジン。新たな書き手を求めています。

新たなジャンルからの、書き手の登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分の専門分野の今の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌です。必要な回数を、書いていただけるよう設定します。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。非会員で書いていただく事になった方には、対人援助学会への入会をお願いします。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

「深夜特急」は我が世代から、しばらく下までの若者にとって旅のバイブルだ。みんな、バックパッカーとして旅に出たかった。そんな自由な選択が、世の中にあることを学習した第一世代だ。

でもそれは、誰にも、いつでも、上手くいくものではないことも、たくさんの人が学んだ。上手くいった人だけが手柄話のように語る世界旅。そうはならなかった者にも物語はある。

青年は荒野をめざしたが、勝利は届かなかった。アルバイトを詰めて詰めて、新しいバイクを買って、世界一周に出かけた青年が、日本海を渡った直ぐところで野営中、殺害された。

バイクや旅の資金が狙われたのだ。彼が今から執筆しようとして準備したブログの序章が、長い間ネット空間に放置されていたという。

世界はそんな風に危険にも、冒険にも充ちている。

(2019/12/15)